

## 「幼少期における読書活動の推進」

学習院大学 教授 秋田 喜代美 先生



皆様こんにちは。ただいまご紹介に預かりました学習院大学の秋田でございます。

この度は別府大学短期大学部の仲嶺まり子学長先生をはじめ、幼児・児童教育研究センターの公開講座にお招きをいただきましたことを大変ありがたく思います。

私は絵本専門士や認定絵本士養成講座の立ち上げに最初から関わっておりますが、今回別府大学短期大学部の方でも、いろいろと関わらせていただけるというようなことで大変ありがたく、嬉しく思っているところでございます。

本来であれば皆様の所に伺ってと思っていた

のですが、このような状況でオンラインで失礼いたします。

本日は主に三つのこと、①幼少期の絵本との出会いが子どもの発達にどんな影響があるのだろうか ②保育や教育の場での絵本との出会いで私が考えたいと思っていること ③幼少期の読書推進ということで、お話をさせていただきたいと思っております。

最初に幼少期といっても今日は主に乳幼児期の話をさせていただきます。

### 1. 幼少期の絵本との出会いが子どもの発達にどんな影響があるのだろうか

皆様も赤ちゃんの絵本との出会いは、このようなご家庭やブックスタートの姿ですが、園の中で子供同士でこうして関わったりしている姿もごらんになっておられるのではないかなという風に思います。私はNPO ブックスタートが立ち上がる前、2000年の子ども読書年の時に、ブックスタートの立ち上げのためにイギリスに行きました。そこから福音館の今はもう相談役になられている松居直先生にお声をかけて頂いて、この活動をみなさまと共に立ち上げるようになりました。

この2000年以降になってから、赤ちゃん絵本の出版点数は、大きく変わりました。このことで私自身は「本当に社会文化的な環境ということは大事ななあ。」と考えているというようなところであります。

見ていただくといいのですが、このような形ですね。自治体の件数も増えていきます。大分県を調べさせて頂いて、18ある市町村で10がブックスタートの取組がなされ、類似事業が行われているところも3自治体あります。このように別府市も大分県も力を入れてくださっているということがわかります。

#### ブックスタートとは？

赤ちゃんや保護者が 絵本を介して  
心ふれあうひとときをもつ きっかけを  
地域に生み出す 全ての赤ちゃんに届ける活動です



最初から、「Share Books with Your Baby」という理念でありました。立ち上げの時にとても印象深かったのは、松居先生がですね、「この活動が成功したかどうかはこの絵本を読んでもらった子供達が大人になって親になった時にまた次の世代に絵本を手渡したいなって思えば、それがこの活動の成功なのですよ。」って言われたことを思い出します。

多分、絵本や本の推進が今日のテーマですけれども、それは長い目で子供が絵本と出会っていくそうした育ちが近視眼にならず、見ていくことが大事だろうという風に、松居先生は私たちに教えてくださったのではないかなと思います。

改めて、大分の皆様にお話をするのに説明は要らないかもしれませんが、赤ちゃんと保護者が絵本を介して、心ふれあうというシェアすることが大事なのです。“read to”というような「教える、読んで伝える」というよりは、「シェアし合う」ことが私たちのキーワードになっています。

そして、集団検診や個人の検診の時に保健師や司書さん等から手渡されるということでありまして、当初、ブックスタートを立ち上げた時は、「赤ちゃんは絵本とか見るんですか？こんな小さい子が？」ということがありました。それに対して、写真を当初、いっぱい出しました。ところが数年たって私たちが気づいたことは、「赤ちゃんも周りの大人も一緒になって笑っている」そういう姿こそ実はとても大事なのではないかということでありました。

そして、これはその自治体によって違っていますが「ブックスタートパック」というような形で、各自治体の中で子どもを中心として、いろんな人が皆で繋がりあっていく。これが日本のブックスタートの特徴だと思います。

イギリスから学びましたが、イギリスのブックスタートの場合には企業がお金を出していること、それから保健師さんとか図書館の方とか専門家だけ本を渡していくということです。それに対して、日本は市民ボランティアが、そしてまた自治体の税金等を使って実施するというのが、大きな特色になっています。

イギリスで、なぜ始まったかと言うとイギリスにいろんな移民とかの人とかが入ってきて、母国語が英語でない、そういう人たちが学校に行っても困らないようにということからシェアスタートという確かな学力をつけるということの一貫で、赤ちゃんに本を手渡す運動は、実は始まっています。日本で始まった時には、それをむしろ子育ての喜び、子どもと共に絵本を分かち合う喜びを、ということを始めました。その後日本で始まったことで、東南アジアにも広く広がったということです。実はイギリスでは「ブックスタート・シェアスタートをしよう」という開始の契機となったデータ等があります。生まれてから3年ぐらいのうちに親の社会階層によって、子供たちが親からかけてもらう言葉の量がこんな風に3倍近く違ってくるとか、それから言葉でかたりかける質もどちらかと言うと経済的に厳しいところのご家庭では「禁止の言葉」制限的な禁止的な言葉が多いのに対して、経済的に恵まれた家庭のお子さんには肯定的で受容的な言葉であったり、絵本のことばのような生活の言葉だけではないたくさん語りの言葉を知っている、学んでいるというようなことが分かってきて、この格差を埋めるためには、赤ちゃんの時から絵本を共有することが大事だというようなことが言われてきたということになります。

やはり、社会経済的な地位というのが3歳児時点で、学校に行くのにどれぐらい準備ができていけるのかという能力や、(グラフの説明：これ右に行くほど富裕層です)日本でも今は特にコロナ禍で、経済的に厳しい状況になっています。そうした中で、絵本というものが、全て困っているご家庭も含め、イギリスでも援助がなされていました。それによって、子どもの問題行動とかそれから多動性とか、発達に遅れが見られるようなお子さんに保証して支援していくことは発達支援としても良いということも分かってきています。

ブックスタートはお住いの自治体から赤ちゃんへ絵本の読み聞かせの体験をプレゼントする活動です。絵本でお子さんとのふれあいを楽しんでほしい。そんな願いが込められています。動画であったり、

海外で紹介しているのですが、そこでは「愛情あふれる しあわせことば」という表現が使われていたりします。少し前の調査ですが、私も関わらせていただいて、ブックスタートとか赤ちゃんに絵本を手渡すという活動は、自治体によって最初の検診がいつあるかということが違っております。それによって、3・4か月、9・10か月とか絵本を手渡した時に、その後の赤ちゃんにどのような違いがあるのかという質問紙調査を行った研究があります。結局、私たちがわかったのは開始時期に、ご家庭で絵本を赤ちゃんと読むのは7・8ヶ月ぐらいからが多く、また、9割の方がおうちにある絵本を読まれるのが一歳前後だということが分かっています。もちろん早いご家庭と相違はありますが、子供の発達のメカニズムとして、やはり一緒に見るという注視というようなことが、影響しているのだろと思うわれます。

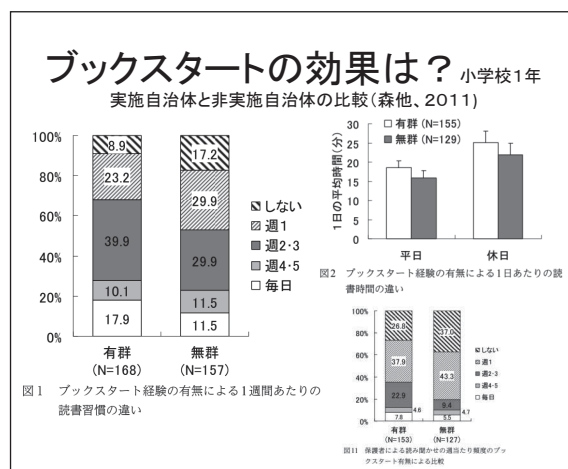
赤ちゃんは生まれたときに大人で言えば近視状態で、0.3ぐらいの視力だと言われています。焦点が20～30cmあたり。そこに絵本を向ければ、赤ちゃんはよく見ます。大体9ヶ月かかると言われるように、一歳頃になってくるとお母さん、保護者やお父さんの見る視線を追いかけるとか、模倣をすとか、指さしをすとか、そういう愛着ということができていくのはやはりこの後になるので、この7・8か月ぐらいっていうところが多分妥当で、絵本を手渡す早い・遅いの時期はあまり関係なさそうということも分かっています。

赤ちゃん絵本の出会いの活動は、「NPO ブックスタート」だけの活動ではありません。今や世界的に広がっています。世界的にこういう絵本との出会いのネットワークをつくられた佐藤いづみさんが、ブックスタートを立ち上げる時からご一緒している佐藤さんが今もその担当をしてくださっています。

「ブックスタートって効果があるのか」というような調査ももう10年ぐらい前になるのですが、ブックスタートやブックスタートと類似の事業はほぼ同じと考えられますけれども、やっている自治体と行っていない自治体の効果の違いというものを、福井におられます森先生が調べておられます。(グラフを示し) こちらの左側が「有り」群ということで、絵本を受け取った、検診で本を頂いている。という群です。こっちはそうではない。(受け取っていない) 群です。見ていただくと、「だいたい週に2、3日ぐらい読みます」「毎日読みます」の割合を見ていただくと、特にこの週2、3日でも絵本を読もうかということが大きく違っていることがわかります。また、平日はさほど違いがなくても、休日に読もうかということになったり、それから、「読み聞かせの頻度」と「お宅に読み聞かせの絵本があるかどうか」ということで本を読む頻度は、どう違うかなどがこの結果になっています。

森先生達は、赤ちゃんの時からの経験というものが、子供のその後の読書習慣をつけたり様々な方への興味が高まったり、テレビの時間には影響しないけど、ゲームをする抑制にはつながり、図書館利用の習慣とか読書習慣が高まる。ただし、それは親の回答の方のことであり、子供にはあまり関係ない結果であり、保護者の意識が取り組みにより変わることを出されています。

私もずっと関わって行っているベネッセの調査ですが、毎年行っても、だいたい同じなんです。3歳ぐらいをピークにしてだんだん読む頻度が減ってきています。幼児期は絵本を読んでいるというイメージがあるかもしれませんが、今は親御さんも忙しくなり、3歳をピークに少し減ってきているというような状況にあります。さらに1年生になるとガクッと減るのです。そして、2、3、4年



生と読み聞かせの頻度は、学年とともに減っていくということが分かっています。

「絵本の読み聞かせの効果は」ということについては、3歳から6年生まで、毎年保護者の方に調査させて頂いています。それでわかってきていることは、幼児期の読み聞かせが児童期の読書体験に影響するということです。子供が一人で本を読もうかなということに影響し、それが小6年生の言語スキルとか論理スキルと言われるものに影響を与えるということを日本の子供たちのデータで出したりしています。

子供の言語スキルとか論理性と幼児期にどれくらいの頻度でどのくらいの時間絵本を読んでもらったかの関係の調査もしています。

親の年収は関係ないですが、お母さんが熱心かどうかということには学歴ということが、これは国際的なデータを見てもそうですが、どちらかと言うとお母さんの影響が大きいわけです。読み聞かせの時間が小さい頃から読んでもらうと、児童期の小学校低・中学年ぐらいまで、一人で読む頻度や、それから読書体験を共有する読書体験というのは、本の内容を話し合うとか実際の出来事と関連付けて本の話をしたり、それから挿絵から見つけたことを話すとか、本について子どもと読書の楽しさを伝えてますとか、3,4年生ぐらいだと論理性にも言語にも絵本が影響するということが分かっています。

その後まだ子供達を追跡して、小学校6年生までどんな影響があるかということ調べました。お母さんの読み聞かせの頻度とか、子供がそれによって読み聞かせの時間も頻度も、また一人で子供が本を開いてみることに大きく影響します。そして、それが児童期後期の小学校4,5,6年生という高学年にも影響するということが分かっています。

また、保護者が中学年ぐらいまで一緒に絵本を読んだり、本の体験を話し合ったり、読書を読んで、親子でそういう話題をするということは、高学年の読書に影響し、それが子供の論理スキルとか言語スキルというものに影響があることが分かっています。どうも、高学年になると「親子でそういう話の時間がない、ほとんどない」というご家庭が多いせい、あまり子供の言葉の発達と高学年のところで本の影響は見られていないのです。しかし、こんなふうな結果が分かっています、幼児期の読み聞かせは小学校中学年までの読書体験の共有に影響を与える。だから乳幼児期の絵本の体験は大事だし、また小学校の低・中学年で親が親子で読書体験を共有するというようなことが、その後の一人で子供が高学年になっても「一人で本読んでみようかな」とか言語発達とか思考に影響があるということが分かっています。

小中学校の間に忘れられない絵本とか本とかと出合っている子供は生涯、絵本を好きだということも子どもが行った青少年教育機構の成人の調査で分かっています。これは高校や大学になってからではなく、やはり義務教育あたりまでが大事なんだというようなデータにもなっているということです。

では、ご家庭には絵本がどれくらいあるのかということも東京大学発達保育実践政策学研究中心（CEDEP）で調査をしました。「ご家庭にどれくらい本がありますか」ということで、多ければ良いということではなく割合を見てみました。すごく差が大きい。一番多いのが家に10冊から30冊ぐらいですという幼児期のお子さんの親御さんの回答が多いという結果が得られています。

一日15分、子供達に絵本を読んでくださることが子供の社会情緒的な発達や将来にわたるその幸せを生み出していきます。それは「子供にとって読んでもらう権利なのです。」ということが欧州EUでは訴えられています。

私が中国に講演で福建省に行った時に、一番その地域で困難な学校だったそうですが、成功した学校に出会いました。その学校は親子で絵本を読んでいる風景を学校中に貼ってあるんです。子供達はこういうお父さんお母さんが絵本を読んでもらった、それを家族の一人が写真に取っているわけです。こういうことをやっていくと、ご家庭と園や学校が繋がっていくという話を聞きました。こうして読書を幼少期にするということが、すごく子供達の幸せを保障するというようなことが分かっています。

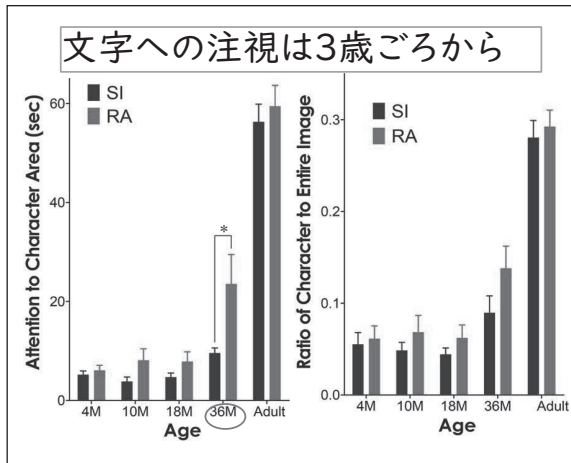
ます。そこで大事にしたいことは何だろうかということでもあります。

これについては、乙部先生の少し前の研究ですが、この研究はいいなと思ってご紹介をしています。聞いてください。これは私が乙部先生と日本発達心理学会の学会で一緒した時に分けていただいたスライドですけれど、当時は、今はタブレットですけど、当時はこういうパソコンのディスプレイの前にご家族に来ていただいて見ていただくというような形で、お子さんはどこを見ているかというようなことが分かるということでもあります。いろんな月齢のお子さんにパソコンの画面で提示して、その時の視線がどこをお子さんが見ているのかを計測したというものです。それでその時に保護者の方に読み聞かせをしてください。ただし、指さしはしないでください。これはread aloud というものです。もう一つは、黙ったまま、ただ絵本の絵が出るだけのものです。

さあ、子供達はどれくらい良く集中するでしょうか、読み声があるものと子供の注視という＝よく見るということでもあります。(グラフを差し)こちらがread aloud 声で読んでくれる。こちらが黙ったままである です。見ていただくが一番違いが出てきているのは、10ヶ月です。先ほど「10ヶ月から1歳ぐらいということが、子供達にとって絵本と出会っていく、すごく関心を向ける時期ですよ。」とお伝えしましたが、さらにこんなことが見えてきます。おそらく3歳とか大人になれば、読んでもらわなくても自分で文字が読めるようになります。そこで、次に乙部先生は今度は何か声を聞かせてもらおうと子供がよく見るわけですけど、音があればいいのだろうかということでも読み聞かせしない群、音ではなく声だけの群、声じゃなくてクラシック音楽が流れる群、それから短大生に読んでもらう群、とお母さんご自身が読み聞かせをする群で、どの群が同じ絵本を読んだ時によく見る(注視する)かということの研究されました

認定絵本士の講座でもこの部分を少し説明しているのですが、皆さんは「お母さんが読むことが1番長く子供が見るだろう」と思うわけです。が、あの大事なことがこれ。お母さんの声と女性の声を読む、を比較して調べているのですが変わりがないんですね。それに対して、後ろでBGMが流れているだけでは、子供はよく絵本の絵を見たりはしない。子供はちゃんと聞き分けしているということがわかります。つまり、語ってくれる自分に対して声を自分にあてて語ってくれるということがとても大切である。スマホで子守りではなくって〇〇ちゃんに向けてお母さんやお父さんや保育者が声を届けてくれているということがとても大事だということがわかりますね。絵本は絵と文字から成り立つわけですが、ちょうどこの子供達は見ているのだろうかということと同じ月齢で調べています。でも絵・文字への注視という、よく見るということはいつ頃起こってくるのであろうかということも調べたものです。これもやはりread aloudという声を出して読んでいる時と、それからこちらがサイレントで黙っているときです。見ていただくと、文字への注視の違いが一番多く見られるのは、3ヶ月ぐらいの時ということになります。やはりこれは、すごく小さい時は文字があっても子供は関心を示していない。だから文字が書いてある本だから子供を早く文字を読むようになるとは1,2歳の時から思わなくても、この時期はあまり関心がなく、やはり本当お父さんお母さん、いろんな人たちの声が大事だということが分かってきました。読み聞かせ、絵本の読み聞かせの有無による行動は、10ヶ月ぐらいで一番大きくなるということ、それから10ヶ月時の絵本の注意効果は、人の声による話しかけは大事なのですが、それは決してお母さんだけの声には限らない。そして、3歳くらいになると読み聞かせで文字に注意するようになってくるというような結果が分かってきています。絵本は絵文字と絵と同時に文字で成り立っているわけです。

では、絵本の絵を子供はどう読んでいるのかということ。 (絵本のイラストを示しながら)「小さな猫」という絵本のここを見てください。さくらちゃんという子どもです。これですがこれこの下がないです。なぜ、取れちゃったかなと子供たちきくわけです。お母さんは「高い木の上だからこうやって書いたのよ。」と言います。「ここに猫が登っている。猫が上へ登ってね。でも犬がいるから降りられないの。」って。でも確かに取れていますよね。この部分が省略されている。



こんなことも子供たちは不思議に思っている。それぐらい丁寧に見てるのだな—っということがわかります。これは同じさくらちゃんが教えてくれたことです。

この「小さな猫」のお話の中で「お母さん、ここにぶつかっちゃうよ」って、猫のしっぽのところを差して子供が言っています。お母さんは「ぶつからないよ。この子達は遊んでいるのよ。」と言っているわけです。私たち（大人）は遠近法ということを学んでいますから、手前に猫がいて人が奥にいるということがすぐわかります。しかしながら、この3歳ぐらいのお子さんにとっては、これ

で（鼻）で叩かれちゃうというか、そういう風に見えるのだな—っということがわかります。お話では、この猫が子猫を探しに行くというのがストーリーの中心なのですが、3歳ぐらいのお子さんも本当に丁寧にいろんなところを見て、自分なりの疑問を持っているのだということがわかります。単に読んでもらってその部分だけを見ているのではなくて、子供は十二分にこの絵本の世界を隅々まで楽しんで。それをお母さんもこのさくらちゃんのお母さんは応じて一緒にさくらちゃんの不思議に気付いてくれたりする。そういうところが、とても大事だと私は思っています。

3歳以下の頃には最初はそのまなりきって、一緒に動いたり絵本の世界というのはまさに実物と同じ世界のまま生きています。家庭にお邪魔した時のことを覚えています。訪問してご家庭で絵本に長靴が出てきたら、トコトコって出かけて出ていっちゃう。どうしたのだろうって思ったら自分の長靴を玄関から持ってきて、絵本の長靴と対比したり、それからお話の中に出てきているものを見立てたりする、それがこんなふうにだんだん頭の中で絵本の世界を抱けるようになっていくというようなことが3歳児期までの特徴という風になっていくのだろうと思います。絵本がわかるということについて、内田伸子先生は「物語の理解や産出ということは、遊びやお話と関係がある」ことを明らかに示されています。（今日は時間の関係で細かくはご説明しませんが）物語が十分経験でき楽しめるようになるには、一緒に色々な遊びを子供が経験していく、その中で知的能力や社会情動的な能力や身体的能力、頭の中でイメージする力であったり、原因や結果について理解する能力であったり、これが大事なお話だなとか因果がわかったりする、出来事が繋がっていくことがわかるわけです。

今はご家庭だけではなく、かなり小さい時から幼稚園・認定こども園等に行かれるご家庭も多くなってきました。その中で、ご家庭もそうですが、みんなで読めたら楽しいというところがあると思います。ブックスタートプロジェクトの共同研究の仲間でも今、奈良教育大に勤めてらっしゃる横山真貴子先生が、「園で子供たちが繰り返し読んでもらったら同じ本でも読み方関わり方が変わってくる」って示しています。最初1回目はやはり保育所の人の方が多いのですが、だんだん2回目以降になるとですね子供の方がイニシアティブを取っているようなことを言うようになっていく。子供自身が繰り返し読んでいくことで「あっ次、こうなっていく」という見通しを持って予見したり、自分がその登場人物になりきるとか同化したようなことが起こっていきます。

また、集団の読み聞かせ、先生方も今日お越しになっている方、それから短大の学生さんたちも絵本を読むということで、実習をされたりしたという方も多いと思います。その時にベテランの保育士さんが、どうやって子どもたちを見ているかということ、あの眼鏡みたいなもの（視線センサー付き）をかけると、その読んでいる人がどこを見てるのかが分かるという装置があります。それを使いながら、山形の奥山先生が調べられた研究です。まず「最初の手前の子供の体や姿勢のあり方を注視する」と同時に遠くのお子さんがどんな風に読んでるかな—って、読み聞かせ以外の現象に注意が注がれて

いないかなとか、子供の注意を保育者の表情にあて、「見てるよ」って目線で合図しながら、人前で読むようにしているというようなことがわかります。そして、読み始めると今度は子供の反応に対して、他の子どもはどうしているかと、皆さんもそうだと思います。そうやって見ている一方で、保育者は他の事象に注意をそらしているような子どもたちが出ることに敏感です。ちょっと注意がそれやすいお子さんを、ただ定期的に強制的に引き付けるわけではないのだけれども、期待をもってみるとか関心が出てきたところで注視を行うことで、絵本の読み聞かせに引き込もうとしていることがわかります。

絵本の読み聞かせで重要なことは絵本の読み方ではなくて、読むと同時にそれを聞いている子供たちの応答してくれる表情や姿を受け止め、そこに対してこの一枚一枚、一ページページの絵本の中で応答したり、視線を交わしたりしているというところにあるのだと思います。そして、話が進んできて後半になるとだんだんもっと読み聞かせで、どの部分を子供がよく見ているんだろうかというようなことを、めくったり見たりしている、ページをめくる時にこんな小さなことですが、もとの頁とのめくるペースを感じながら、発話が丁寧になっていくというようなことも見えてきているというところになります。そして、そういう保育者が読んでくれるということだけじゃなくて子供自身が自分で絵本を選んで、自由に読むということも大事だろうなと思います。(写真を示しながらの話)

また保育所の方は、絵本の世界や余韻をいろんな場面で味わってほしいなと思って、こんなふうに行われている園があります。ちょっと落ち着きますよね。それからこの園では単に本を紹介するだけではなく、子供たちのお気に入りの絵本ということで、例えば、この絵本を選んで読んだときに「何々ちゃんはこんな話をしましたよ。」というようなエピソードとともに、保護者にご紹介をしている場面になります。「今、子供はこんなものが好きですよ」というだけではなくて、やはりそのクラスやその目の前の子供のエピソードがあると親御さんも関心を持ったりすると思いますし、またそこで一緒に借りようと思います。そして、そういう絵本のコーナーというもの、とても園によって違いがあると思いますけれども大事だろうなと思います。

こういう時に親子で楽しむということで、これはある園が、ダンボールですが「絵本の何を載せようか考えながら一緒に親子で作って下さいね。」って親子で「絵本立て」をつくるというような活動をされていました。自分が作った絵本立てなら大事にするでしょうし、お家に帰っても、図書館から借りてきたものでもいいし、園から借りてきたものでもここに飾ろうと思う。そして読もうと思う。こういうことが読書のご家庭での推進に大きくつながるのだらうと思います。

また、私自身がよくご紹介しているのがここにある園の写真なのですが、「今日読んだ本」と書いておきます。そうすると、家庭でも「先生がこれ読んでくれたんだ」ってわかります。保護者の方は、今日はこれを読んでもらったのかとわかるわけです。そういうこともすごく大事なかなという風に思ったりするところです。

また「かこさとし」さんが「川」という本を書いています。この園ではその本を読んだときにこんな風（階段にそって貼られた大きな川の絵）に階段を上っていく時に子供達を楽しめるような掲示の仕方をして、毎日毎日子供達はこの川の絵本とこの階段を登りながら会話していくいくみみたいな使い方でしょうか、絵本の楽しみ方をしている園もありました。

子供たちの連続的な育ちを保障していくためには、やはり保護者の方と特に乳幼児期には情報を園と共有するというようなことがとても大事になります。保護者の方が読み聞かせだったり貸し出しだったりしたら、その絵本の何か貸出ボランティアになられたりするということによって読み聞かせや参観やそれから中には図書整理なんかにも参加される保護者もおられますが、一方で園からも「園便り」であったり「絵本便り」というものを出されている園を、福島園で存じあげております。絵本のことだけについても「私の園は・・・、この園はこんな工夫していましたよ。」と送ってくださるとまた楽しいだろうなと思います。また、同じように子供の記録も一緒になってそれを共有してい

くというようなことも大事かもしれません。今こんな状況ですよというようなことをお伝えする。また、子どもの育ちにに応じて伝えていくということが大事かなという風に思います。これは鳥取県で私実際に参加して見せていただいたものですが、家庭での読み聞かせに関してワークショップをされていて、それは保護者の方が参加されているのですが、「なかなか忙しくて読めないよね。」とか「じゃいつ読んでいるの。」「どんな工夫をしているの。」と情報交換し合い、「家事に忙しい時は、お母さんがお父さんにうまくパスを送って読んでもらっています。」とか「あの年齢は好みによって、いろいろな本が読まれているようです。」とかちょっと保護者の方と絵本について付箋を使いながら語り合うということがなされたりもしたりしていました。そして今、子供を中心にしながら、親子と園が繋がりがあっていたり、それから図書館も含めつながりあっていたりすることが大事かなという風に思っています。

今日、いろいろ事例をお話しさせていただいていますが、「ふくちゃんのすてきなばんつ」という私が好きな本です。今日は全部を読むことができないのですが内容は、ちょうどおむつが外れる時に、お母さんがとっても柔らかくて素敵なパンツを出してくれるのだけれどなかなかうまくできず、失敗しちゃってパンツが濡れちゃうのです。そうするとお母さんが大丈夫よって言って、おかわりパンツを一杯準備してくれて、「お母さん、ごめんなさい。」でもいっぱい用意してくれている。失敗して持っていくと、「安心して大丈夫大丈夫。」とお母さんが言いながら、これも失敗しても受け止めてくれる親のことを語っているのですね。子供にもいいと同時にお父さんやお母さんがちょっとイラッときた時なんかにも、こういうのを読むと親の方がほっとする、そんな絵本なのかなーっと思っていて大好きな本です。

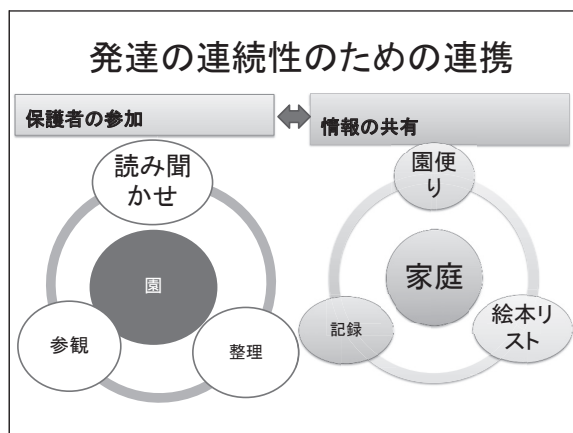
## 2. 保育や教育の場での絵本との出会いで私が考えたいと思っていること

絵本というのは、先ほどは絵本が論理的な発達に影響があるのですよって量的な話をしましたが、事例として私が出会ってきた中で特に心に残る出会いの姿ということで紹介をさせていただきます。

これは私が実際にアドバイザーで関わっている保育園の事例です。4歳児クラスで一人だけなかなかクラスのお子さんの中に入るのが難しいお子さんがいました。(画像を示し)この子がAちゃんですが、Aちゃんは感情が豊かで理解力もあります。ただ、ちょっと手が出てしまったり情緒不安定だったり、お友達とうまく関われないというようなお子さんでした。担任の先生が何かをやらうとすると「私やらないからやらない」ってわざと担任に言いに来て、そしてみんなは何をしているのかとチラッチラッと見て、そして、担任に「おいで」って言われれば、その担任にはすぐに寄っていく。みんなが終わった頃になると、担任の先生を独り占めしにいく、みたいなお子さんでした。この時のAちゃんの気持ちとして、担任の先生が理解されていたのは、「周囲の子に見られたくないとか、なんか友達ほどうまくいけない、失敗したくない気持ちとそれから担任を独占したい」なんて気持ちなのかなーっと思っていたそうです。それが5歳児になった時に担任は紙芝居で「ロボットカミイ」という話を読んであげます。そうするとAちゃんは「私これ好きじゃない。」って言うのです。それが好きに変わったということになるのですが、少しずつ先生が読んであげたりしています。担任は「私はその前のクラスの人たちとあの絵本見たいな『ロボット・カミイ』を紙でつくったんだよ。」とお話をします。そうするとそれをAちゃんが聞いて、今度は家で絵を書いてきます。小さい頃から真似して書くのが上手だったAちゃんですが、自分の思い入れが強いのもかもしれないけど、こんな絵が出てきます。今度は実際に紙で作ります。面白かったのは、「あれ壊されるといけない。」って言って家に1回ずつこのカミイを持ち帰るような姿がありました。ご家庭に「Aちゃんは『カミイ』の本が好きなのですよ。」って言うと保護者の方がAちゃんに、この本を買って下さったのです。先生がAちゃんに訊きます。「最初はカミイの話嫌いだったのにどうして好きになったの。」Aちゃんがこう答えます。「カミイが意地悪してひとりぼっちになったことがかわいそうと思ったから。」途端に先生は、はっとするのです。Aちゃんは、今までつい手が出てしまったりでお友達とトラブルが多くて、そうする



とひとりぼっちになるのです。この子はカミイと自分を重ね合わせてるのだということに先生はなんとなく感じるわけですね。Aちゃんはロボットカミイをダンボールで作る時も私だけのものと言って、作っていたのですが、だんだんと友達が手伝ってくれるようになり、このロボットカミイの人形を作ることで子供たちがサポートしてくれるとそれを受け入れるようになってきました。みんなも恐る恐るなんです、Aちゃんを怒らせると怖いということが分かっている、だんだんかかわっていくうちにAちゃんもみんなの中に溶け込んでいくというような姿がありました。逆に今はAちゃんがみんなのを見て「今度はこういうの作りたい」、Aちゃんがある意味でクラスの中心になりながら、ロボットカミイの絵本を何度も見ながら子供たちがこういう遊びに展開していくというような形で。



そのうちこの絵本との出会いからAちゃんは情緒もずいぶん安定してきた、というこのようなことが起こったという事例です。安心感の高まりが表現したい、やってみたいという気持ちにつながっていったということです。Aちゃんにこの「ロボットカミイ」の一冊がピタッとハマったということだと思います。これを全てのお子さんにこの絵本がぴったりかというとはそうではないかもしれませんが、担任との信頼関係やご家庭との連携があってもありますけれども、その中で忘れられない絵本と出会うというようなことを通して、気持ちを自然に表現できるようになったり、人と繋

がりあっていくことができるようになったり、こういう姿を見ると一冊の本と子供の出会いが与えるものは「〇〇力」がつくということだけではなく、まさにその子のまるごとの世界のかかわり方を変えていくような、そういう力を持っているなということを感じたりします。

また、みんなで遊ぶというような姿の中にも絵本との出会いはあります。これはたまたま絵本を読むのではなく園にツバメが巣を作りました。巣の中には卵かヒナはいるかなと思ったわけです。担任の先生は考えます。自撮り棒を使ってこの巣を写します。なんと中には卵がありました。ヒナが孵ってきました。子供達はもう興味津々です。ICT といつかタブレット一つ、スマホと自撮り棒を使ったことでこんな風な出会いができました。その時に、子供達に先生がちょうど「ツバメの旅」という絵本を読んであげていたので。これは副題が「5000キロの彼方から」という科学絵本です。子供はこの本を読んだ途端に「映画館ごっこをしたい。」という風に言い始めます。そして、またいろいろな形で取り組みます。この園では毎日の出来事を「ドキュメンテーション」と言われる方法の通信で知らせています。

この絵本を使って、「映画館ごっこ」にしたのです。そしたら子供が色々な事を作ったり映画の券を作ったりしながら、「開店しました」なんていう報告をします。私もツバメは日本に来るのは知っていましたが5000キロというのがどこからかということまで知らなかったのです。マレーシアの辺りからあの小さなツバメが飛んでくるのだということを知りました。こうした偶然のものとの出会いから、それを裏付けたり、さらに世界を広げてくれるものとして本があり、いろんなジャンルの絵本に子供が出会うということが大事かなと思っています。また、絵本は子供だけでなく、家族も繋いでくれます。「お誕生日の時に生まれた時の写真を持ってくる」というような活動をしていて、保護者も子供のお誕生日の時だけ園に来てもらっています。そこで読んだ絵本です。ご存知の方もおられるかもしれませんが、「君のいた場所」と言う絵本です。(絵本の朗読)

5歳の子供達は本当に真剣に聞いています。お父さんも参加されていて、お父さんもなんとなく涙ぐんでいます。今聞いていただいたらお分かり頂けるように少し、子供には難しい本だと思います。

しかし、子供たちは分かるのですね。真剣に聞いています。そして、その後はお誕生のことなどをみんな語り合ったりしています。それが笑顔であります。やっぱり子供達は自分の誕生について一緒にお父さんや仲間と分かち合うのは嬉しいのだと思います。

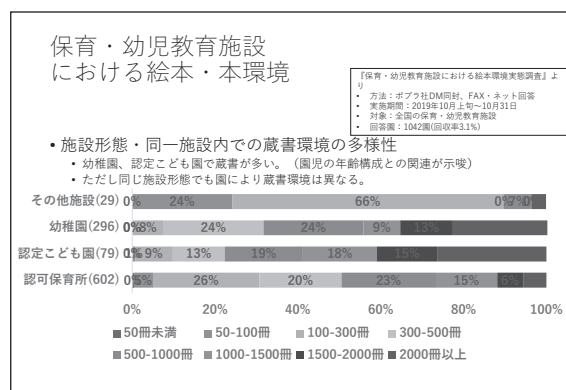
この園ではこうしたお誕生の時に命に関わるたくさんの絵本、それを「命のカリキュラム」として読んで差し上げたりしています。保護者の方が「こんなだったんですよ。」って思い出して、インタビューを受けたおかげで生まれる時の様々な感情やエピソードをたくさん思い出し、親として感謝と幸せを感じることができました。というようなメッセージが寄せられたりしています。それをドキュメンテーション（便り）にして共有をしていくというような姿があったりします。いろんな絵本に出会いながら保護者、またその絵本を通して子育てのことを伝えています。こんなふうに絵本との出会いということが、いろいろな可能性を広げていることがあると思います。

### 3. 幼少期の読書推進について

私たちが保育幼児教育施設における全国調査という東大CEDEPでさせていただいた調査があります。

かなり多くの施設、そうですね33000園に送って1000園ぐらいが回答してくださいました。この大分・別府でも回答していただいた園もあると思います。「園で所有している絵本のおおよその数を教えてください」ってお願いをして、私たちが思ったのはこんなに違いがあるのだということでありました。多い園から少ない園まで多様であります。それから絵本の購入予算につきましても、基準が小学校以上は図書標準とかあり、地方自治体の一般予算ですけど一応予算が割り当てられています。

しかし、園や保育園はそんなことがないので園によってすごく大きな違いがあります。また蔵書数や予算もすごく小学校や中学校に比べて少ない。というような一人当たりの絵本の冊数も園の歴史によってかなり違いがあります。大きく違っているということもわかってきました。予算等は一桁、小中学校より園の予算の方が少ないということも分かります。実際に表を見ていただいた方が分かりやすいかもしれません。これは別のところで使ったデータです。蔵書数が少ない園ほど近隣の図書館や公立の地域の図書館を活用する頻度が高いということもわかりました。全ての園がそうしているということではありませんけれども図書館と園が連携することによって、予算が仮になかったとしても上手くする、それを補い合うというようなことができるというようなことも調査で見えてきました。幼少期の読書の推進という時に、やはり絵本の冊数は一定以上いると思うのです。今回私どもの調査で調べた時、「園の絵本は十分ありますか」と聞いた所、ほとんどの保育者は「ある」と答えてらっしゃる。蔵書数が多い園でも少ない園でも不満と思っている保育者がいないということに私達はちょっと驚いたのです。少ない園はもっと上手く、それを図書館やあるいはサイクルや保護者からの使わなくなった本なども寄付してもらったり、色々できればいいのにというようなことがわかりました。例えば熊取町という町は、移動図書館みたいなものが来て園に本を貸し出してくれたり、読み聞かせをしてくれたり他にもそういうサービスが別府もあるのでしょうか。何かそういう様々な公立図書館との連携ということが大事だろうなと思います。私たちはその読書を推進していくという時に、保育者子供が中心になって家庭やそれを支える自治体の役割はとて大きいという風に思っています。



全国の公立図書館の調査をしまして、その中で空間の調査をしたのはたぶん初めてだと思います。どんな風に乳幼児のスペースが作られているのかという冊子を作りました、是非、東京大学CEDEP

と調べていただいたりポプラ社との共同と調べていただければ、この冊子が無料で PDFダウンロードできますのでしていただけたらいいなと思っています。

私は読書を推進していくとき12の原理というものを出しています。まず一冊の絵本や本の中で夢中になって一緒にきき合って、協働注視ができる、繰り返しの経験の中で忘れられない経験、良質な作品と出会うことができる。そして、子どもや保護者が主体的に選ぶことができる。また園や図書館の空間をこえてその本当に絵本を読むという話だけじゃなくて自分で絵本を作ってみるとか絵本の帯とかもそうですけれども自分でもできる活動に参加したり、柔軟に交流をしたり、人とつながりやそしてみんなが活動に笑顔で参加していく、居心地が良いなと思う。そういうことが大事だと思っています。別府の図書館はどうでしょうか。利用者は使いやすいですか、みんなが主体的に選んだりができるでしょうか。コロナ禍で例えばどんな工夫をしているかとか、それからお子さんには外国籍のお子さんや発達に少し困難を抱えておられるお子さんなどいろいろな方がおられると思います。そして、お子さんは誰でもわかるように例えばサインが出ていますかとか、多様な本と布絵本はじめ海外の本やどんな良い経験ができていますでしょうか。繰り返し読んでいく中でどれだけ経験ができていますでしょうか、という冊子を作っておりますので是非見ていただくと、園の中ではこんなことができるかなということも見ていただけるかなと思ったりします。

地域で「子どもの読書推進計画」というものを各自治体がつくっています。その計画の実施の実態が把握されて評価までやっているところとそうでない所、計画をつくったのか、計画と実態と評価までやっている自治体がどれくらいあるのだろう等の調査をしました。実際に「子どもの読書推進計画」というものはつくっているのですが、地区市町村になるとなかなか難しい実態もあります。ボランティアがどれくらい参加しているだろうかとか多様な子どものためのプログラムがあるだろうかとか、計画があるところほど連携が進んでいるということが分かっています。やはり計画を作ること、それから計画に基づいて評価のサイクルがうまく回っている自治体はいろんな取り組みがなされています。これが ICT の調査を去年やり、今年の春に報告を出していますが、それを見てもそうだなというふうに思います。都道府県で47都道府県はどんな読書推進を幼少の乳幼児期にしているのかということ、調べてみました。やはりブックスタートとかあるいはその類似事業は多いんですけど、例えばマタニティーブックスタートとか、プレママ講座っていうことで、妊娠出産から切れ目なくということ、生まれる前から絵本の講座をやっているような自治体があったりします。また最近、乳幼児で多いのが「家（うち）読」以前はまだ小中だったのですね。今は乳幼児幼児でもご家庭で親も子も読みましようっていう「家読」というものがかなり多くなってきています。小学校からの「家読」だけではなく乳幼児期からご家庭で読む本のリストというようなものも色々配布されていますけれど、「マザーズタッチ文庫」とか「本と友達」と絵本リストにもその地域ならではの言葉が付いているというようなこと、また本の紹介じゃなくて読んだ絵本や本を記録しようなんていうことで千葉市さん、今はいろんな所で作っているかもしれませんが、読書通帳とかの形でポイントラリー的なものでこんなもの読んだなという読書の足跡が残るようなものを幼児期から作っているというような自治体もあります。又、家庭・地域でやられていることの一つに「ファミリー読書の日」とか「読みメン月間」は「育メン」の始まりは「読みメン」から鳥取で行われていて、「読みメン手帳」という読み聞かせの記録をお父さんがということをやっている自治体もあります。「やっぱり絵本の読み聞かせっていいよね。」っていうイメージをまだしたことがないお父さんやおじいちゃんやおばあちゃんに行ってもらうためのフォトコンテストなんかもされていたりします。それから今はタブレットとかアプリの開発があるので、自治体によっては幼少期用の読み聞かせアプリを自治体が開発している所もあったりします。

良いなと思ったのは図書館や園だけではなく、児童養護施設等で困難なことを抱えている子供たちにも絵本を届けようという運動があったり「子ども食堂」に本などを寄贈したり置いたりしようと

というような運動も起こったりしています。大事なことの一つは、そういう時にこの地元の独自の名前だとかその地域ならではのものと子供達が出会っていくことではないかなって私は思います。

たまたま私は大分の皆様と、大分の「自分の色地域の色研究会」という取り組み、この別府の別府大学の明星幼稚園とその研究会の皆さんと一緒に共同をしてくださっていることで、学ばせていただいています。大分県、特に別府市っていうのは日本で一番多様な色がある地域だという所です。

子供達が実際に鶴見小学校で経験してくださっているのです。いろんな地域の色を探究していく、そのための手引きになっていますが、子供達はこれでいろんな色に関心を持ってくれたりそれからこの色をめぐる物語を調べたり、知ったりしていきます。別府で小学校の3年生の子供達がいろいろ出会って、書いた絵だとか言葉だとかそういうものが記されています。皆様にとっては、親しみのある別府だと思いますけど本当に色が美しい、それが例えばこの温泉はどこから来ているのだろう。このお宮はどういう云われや意味があってこのような形になっているのだろう、この別府石という石が実は京都大学の石垣等に使われているとか、それからその話です、海と鬼とか地獄の話も載っています。というような冊子をつくっています。私も監修させていただいています。幼児にはまだ難しいかもしれませんが、でもこの一部だけでもいろいろな経験をしていただいてやっぱり火山の石が魅せるいろんな色から絵の具を作って自分で塗ってみよう、というようなことをその明星幼稚園の子どもたちも色々な色水から始まって、その絵の具をつくって絵を描いてくださっているという話を聞きました。多分大分別府だからこそ誇ることやいろんな色というようなところを巡る絵本などとの出会いということもあると、少しその地域ならではの一つに他にも色々な強みが大分県別府市にはあると思うのですが、いいだろうなんていうことを感じながら今お話をさせていただいているところです。園では本当に読書、どれだけ本があったらいいかっていう基準が国でも自治体でも明記されていませんし、図書標準というものも調べてみましたが一件もありませんでした。

やっぱりあの定番の絵本以上に新しい作家が新しい本を書いていますし、それから地域の方しか知らないことを探していくこともとっても大事なことなんじゃないかなという風に思います。

私が最後にお伝えしたいのは、2018年に国際リテラシー学会というところで「こどもの読む権利」というものが謳われています。子供は読む基本的な人権を持っています。子供は、楽しみのために読む権利を持っている。そして子供が読むことによって学んだことを、グローバル・ローカルで共有する権利を有しています。国際的なグローバルにもそういう事を共有していく権利を保障するという事です。これから幼小の読書推進として一番大事なことじゃないかなって思っています。生涯にわたる幸せを絵本や本の世界、そして自分と対話し、他者と対話する、これがとても重要なことであるというふうに思います。私は「やなせたかし」のアンパンマンも大好きなのです。やなせさんの言葉に、これ小学校の教科書に載っている言葉なのですが、「何かを一つ知るたびに何か一つの喜びがある何かを一つ学ぶ度 何かが一とつわかってくる もっと知りたい学びたい無限の道を進みたい」

#### やなせたかしの言葉（名言集より）

なにかをひとつ／するたびに／なにかひとつの／よろこびがある

なにかをひとつ／まなぶたび／なにかがひとつ／わかってくる

もっとしりたい／まなびたい／無限の道を／すすみたい  
—「なにかをひとつ」

- 人間が一番うれしいことはなんだろう？ 長い間、ぼくは考えてきた。そして結局、人が一番うれしいのは、人をよるこぼせることだということがわかりました。実に単純なことです。ひととはひとをよるこぼせることが一番うれしい

絵本の経験が、  
子ども自身の心に生涯の人生の灯をともし、その発火装置としての仲間、保護者、保育者、教師、図書館や書店、地域コミュニティへ



ROBERT M. HUTCHINS

72歳を超えたやなせたかしさんが言われています。そして「人間が一番嬉しいことは何だろう長い間、僕は考えてきた。そして結局人が一番うれしいのは実に単純なことです。人は人を喜ばせることが一番嬉しい。」人を喜ばせることだということがわかり、まさに子供達は絵本との出会いを待っています。大人の役割は子供たちを喜ばせていくそういう役割を担うことじゃないかなと思います。絵本や本の経験が子供自身の心に生涯の灯を灯す、と思います。この写真はロバートハッチンスというアメリカに初めて生涯学習という理念を出した人の写真です。子供の心に火を灯す 発火装置として、保護者も保育所の教室や図書館書店地域コミュニティそしてもしかすると短期大学部の学生さんやそれぞれの教員もまたそういう役割を担っているのではないかなと、私が思っているところです。

今日の私のお話を聞いて頂きましたことに感謝申し上げ、話の終わりにさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

(文責：石川千穂子)